未来へ語り継ぐ戦争体験

戦後69年、今年も3人の方から、若く多感な時期の戦争体験をお寄せいただきました。この貴重な証言を次の世代に伝えていきたいと思います。　（敬称略）

わたしの戦時

山王三丁目町会　福田 和子

初めて空襲に遭ったのは品川区の女学校で授業中。空襲警報で廊下の隅に一列に座る。実感が無かったが「本当の空襲なんですよ」と先生の叱責。同時に向かいの工場で白煙。爆発音と地響き。爆撃は短時間で、その後何日も空襲は無く、そのうち頻度を増していった。

専門学校進学後、神田駅に下車。外に出ると焼けた臭い。兵士が銃を構えて立っている。許可を得て進むと両側の古本屋街はチロチロと燃えていて、だんだん熱くなって来た。夢中で学校に着くと人の気配は無く、怖くなって跳ぶ様に帰宅。人間の疎開先が無くて、足踏みミシンの上だけを、千葉まで背負って行き疎開させたことは、後々お嗤い種になった。

春日橋付近が機銃掃射された時は「バリバリバリ」と耳をつんざく音。二階にいた父が転げる様に下りて来た。大森は何度も空襲に遭ったが、状況は噂で知るしか無かった。

王子の兵器工場で薬莢の検査をしていた時、警報で屋根の無い丸く掘っただけの壕に逃げ込んだ。爆弾の大音響で地面が揺れた。「死なば諸共」と不安な時をやり過ごした。

熊野神社下の自宅で昼間、警戒警報解除。皆ホッとした時、突然山の後ろから黒いＢ29の編隊が現れるや否や「ザアッ」と大音響がして焼夷弾が落下。爆発してそこら中に付着した脂が燃え出した。屋根や物干しに登り警防団とバケツリレーで消火。危うく全焼を免れた。今でもあの不気味な音は耳に残っている。

玉音放送の後「終わったのですネ」と隣のおじさんが自分を納得させる様に呟いた。言い様の無い虚脱感で頭が混乱。どうしてよいか分からなかった。

終戦後復員兵や白衣姿の傷痍軍人が車中や街に。池上通りにはヤミ市が出現。貨幣価値は暴落。国債は０に。銀行預金は封鎖。世の中は180度変わって行った。物資・食料は相変わらず不足していた。

戦争は絶対にすべきではない。　（1927年生まれ）

戦争の思い出

新井宿五丁目町会　野村 鎹市

３月10日の東京大空襲

昭和20年３月10日の東京大空襲は、東京の下町――墨田・江東・浅草など――の大部分を烈風による猛火で、僅か２時間で焼野原にし、死者約10万人、負傷者約12万人に達した人類史上空前の無差別爆撃でした。

当時、私は旧制一高に在学しておりましたが、昭和19年11月ごろから米軍機の東京への来襲が始まると、消防署へ勤労動員されました。昭和20年３月からは３日に１度24時間勤務の体制で、中野区の新井薬師消防署に勤務しました。３月９日夕方からの当番となり、１時間ごとに交代で火の見やぐらに登りました。10日午前０時すぎ下町への大空襲が始まり、東の空は真赤に燃え上がり、午前４時ごろ出動命令が出ました。

刺し子を着用し、消防車の後ろの止り木につかまって出動。新宿、靖国通りを経て、日本橋の阪本小学校が燃えさかっているのを必死に消火活動をし、数時間かかって消し止めました。

物凄い真黒な煙と炎で目をやられ、その後数日間は目の痛みは止まりませんでした。顔は真黒になり猛火のおそろしさを実感しました。

最近、日本橋の近くで阪本小学校の児童に偶然会いました。同小学校が復興して、小学生が学んでいることを知り、嬉しく思いました。

建物の強制疎開

私は、旧新井宿五丁目で生まれ、育ち、今も同じ所に住んでいます。

３月10日の大空襲のあと、突然、我が家を３月末までに取り壊すので、退去するようにという命令が下りました。建物の強制疎開です。家の前の池上通りの西側を約15メートル幅広げることにより、空襲による火災の延焼を防ぐというのです。

途方に暮れましたが、とりあえず母の里の品川区の親戚の家に寄せてもらうことにしました。しかし、その家も５月24日の空襲により焼失し、藤沢や馬込などに転々としました。ようやく５年後に新井宿の元の家の跡地に小さな家を建て戻ってきました。学童疎開で岩手県に行っていた弟も戻り、父母、他の兄弟も家族全員が無事であったことが何よりのことでした。

戦争は決して、してはならないと思います。

▲大田区発行『史誌』23号より転載
曽田三郎氏撮影

学童集団疎開の記

中央一丁目町会　白石 美津子

戦局が不利になるにつれ東京都では、昭和19年１月に建物疎開が、そして７月には学童疎開が実施されることとなり、大森区25校、蒲田区20校の３年生以上の希望者が、静岡県に集団疎開することになりました。勤務先の大森第五国民学校も、熱海他4地区に疎開先が決定。私も３年生の引率教員として熱海の玉の井別館に行くことになりました。くしくもこの旅館では、私の母校の入新井第二国民学校の３年生と一緒でした。先生方も近所の子供達も顔見知り心強かったです。入二では海岸通りの眞誠館に4年生と６年生が疎開しました。始めの頃は家が恋しくて布団をかぶって泣いていた子供達も次第になれ、山に薪を拾いに行ったり、長い廊下をかけまわって宿の主人に叱られたり、だんだん集団生活にも慣れてきました。熱海では米、魚等の配給もありましたが、農地が少なく、野菜は作業員の人が毎日函南の方まで買い出しに行っていました。食事はスイトン、雑炊、たまには白いご飯等。お八つもみかんや乾パン等とまあまあの生活でしたが、食べ盛りの子供達はひもじかったのでしょう。みかんの皮を干して粉にしたり、海で拾ってきたのりを筆まきにひろげて干しのりにして口にしていました。温泉だけは豊富で、大きなお風呂に入ることが出来ました。３、４、５月と東京はＢ29による空襲に見舞われました。旅館の2階から見た東京の空は、真っ赤でした。落下する火の玉も……多分飛行機だったのでしょう。子供達と肩を寄せあって涙をこぼし、家族の無事を願いました。

やがて静岡も空襲をうける様になり、６月に岩手と富山に再疎開になりました。入二も大五も4年生は岩手へでした。岩手は米どころと少々期待していましたが、きびしいのはどこも同じでした。お味噌で味つけしたじゃが芋、大豆のいり豆、雑炊等。またお風呂も水が貴重で最後に入る子はお湯は膝の下ぐらいです。その頃子供達の間ではカイセンという皮膚病がはやりました。不憫に思った村の人達が子供達を一人ずつ預かってくれました。

敗戦をむかえ、11月の始めには、東京に戻る事になりました。村の人達はおにぎりを作り、お餅を搗いてくれました。荷物の中に、まだ青い林檎も入れてくれました。暖かな気持ちが69年たった今でも思い出されます。他の地域に行った子供達も、同じ様であったと聞いています。

その時の子供達も、80才前後になり、鬼籍に入った人もおります。大人も子供も同じ様に懸命に生きた当時のことを語り伝えていって欲しいと思います。

▲玉の井別館での朝の体操

▲玉の井別館の庭にて

受賞おめでとうございます

新井宿自治会連合会　感謝状贈呈

《退任会長》　山岸　穣
《退任副会長》　中井　正浩　町田　松子　沼田　延
《永年在職者》　浦野　栄一　町田　俊貞　山田ひろ子
金堂　和典　浅沼　忠雄　碓井　富世　荒井　壽子
高見　淑惠　溝口美枝子　涌井きみ江　稲葉　節子
中脇　成子　三沢　洋子　（敬称略）

介護家族会の紹介

中央三丁目　色川　啓子

大田区内には現在13ヶ所の介護家族会（ご家族の介護をしている方々の集まり）があります。私は、自宅で介護をしている方の家族会「介護者のリフレッシュサロン」を立ちあげ、今年で６年目を迎えます。毎月１回・第２木曜日に、介護の苦労話や経験談を話しあったり、認知症の講義や体の不自由な高齢者の体験実習をしたり、また簡単な食事会などもしています。

大田区の介護家族会連絡会にも参加しており、２ヶ月に１回の連絡会で、情報交換・近況報告・ケーススタディー　等を行っています。大田区発行の高齢者向け情報誌『ゆうゆう』(年４回)の編集にも協力しています。少人数の集まりですが長く続けていきたいと思っています。一度ぜひ見学にお越し下さい。

【連絡先】　電話番号：3775－5657
メールアドレス：archer_kei_iro@yahoo.co.jp

新井宿第一児童公園がリニューアル！

4月1日から新井宿第一児童公園が装いも新たにオープンしました。公園内には事前の説明会に参加した地域の皆さんが要望したクルクルサイクル【写真】を始めとする健康遊具や藤棚、植込み等が新たに設置されています。

お子さんから高齢者の方まで、色々な楽しみ方ができる公園です。お買い物のついでに、ちょっと立ち寄ってみてはいかがでしょうか。（東急バス山王三丁目バス停の東、ＪＲ京浜東北線沿い）

新井宿特別出張所長着任のご挨拶

４月1日付けの人事異動で新井宿特別出張所に就任いたしました松下賢治と申します。よろしくお願いいたします。前任の遠藤が築いてきた皆様との絆をしっかりと引き継いでいきたいと思います。

今、新井宿地域は、区内でも特に注目を集めているエリアです。村岡花子の半生を描いたNHK連続テレビ小説「花子とアン」の舞台にもなっています。また、平成26年11月には出張所庁舎の移転も控えています。さらに、「障がい者総合サポートセンター」の建設も進んでいます。このような重要な地域の出張所に就任した責任の重さを痛感しています。歴史と伝統のまち新井宿の特色を大切に守りつつ、さらに安全で安心な未来に希望が持てるまちをつくるために、地域の皆様と連携して全力で取り組んでいく所存です。今後ともご協力をよろしくお願いいたします。

ひったくり被害防止キャンペーン

5月27日、ダイシン百貨店前の歩道で、ひったくり被害防止対策のキャンペーンを大森警察署の防犯係が行いました。山王三丁目町会も、このキャンペーンに協力して町会長をはじめ防犯担当が参加しました。大森署からはマスコットの着ぐるみ「ピーポくん」も参加して、道行く自転車に自転車用防犯ネットを配布しました。ネットは簡単に取り付けられ、かごの中が見えないように工夫されていました。瞬く間に防犯ネットがなくなっていく様子から、みなさんの関心の高さを感じました。

山王三丁目町会でスタンドパイプの使用訓練

５月24日19時から根ケ原公園近くの消火栓を使い、スタンドパイプ（放水用具）の使用訓練が行われました。大森消防署の方々、地域の消防団の方々によって実戦さながらの放水訓練が緊張の漂う中で実施されました。地震や津波など大きな災害が起きたとき、消防署だけでなく、地域の人々が消火の重要な部分を担っていくことは力強いかぎりです。

編集後記

山王三丁目町会　編集委員荒井壽子さんが3月をもって退任されました。長年のご功績に感謝いたします。替わって吉川信一が編集委員となりました。今後共よろしくお願いいたします。

連続テレビ小説「花子とアン」主人公 村岡花子は、すでに新井宿三丁目に住いがあった片山廣子から、こちらに来ることを勧められて移り住んだのですが、しかしこのドラマでは、片山廣子は全く取り上げられていません。片山廣子を紹介することは、「この地に住んでいるものの役目だ」と思います。

２・3面では戦争中に青春時代を過ごされた方々の証言です。今、戦争体験をされた方は、すでに70歳を超えて実際記憶にとどめている人は75歳以上の方です。この貴重な証言を次の世代に伝えるのは、まさしく「今」です。

（吉川編集委員）

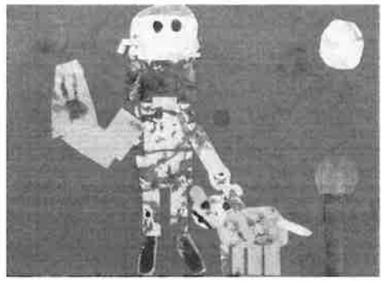
発　行　地域力推進新井宿地区委員会
編　集　「わがまち新井宿」編集委員会

中央四丁目町会	編集委員長	若生一順
山王三丁目東自治会	副編集委員長	荒木秀樹
中央一丁目町会	副編集委員長	齋藤替子
山王三・四丁目自治会	編集委員	山崎三津子
山王三丁目町会	編集委員	吉川信一
新井宿五丁目町会	編集委員	加藤弘子
新井宿六丁目町会	編集委員	河原神風代
新井宿七丁目町会	編集委員	落合松枝

……共同編集……

監　修　新井宿自治会連合会
事務局　大田区新井宿特別出張所
大田区中央４－３１－１４　☎３７７６－５３９１
http://www.city.ota.tokyo.jp/omori/index.html

わがまち Araijuku 新井宿



「犬といっしょにさんぽしたうちゅう人」
入四小４年　小田（おだ）　有摩（ゆうま）さんの作品

もうひとつの『花子とアン』

片山廣子と村岡花子の出会い
～そして大森・新井宿でのこと～

今春、中央一丁目町会の岩井会長から片山廣子を取り上げたらとのご提案をいただき、今号での掲載を決定。合わせて寄稿文をお寄せいただきました。

寄稿文　　中央一丁目町会　岩井 克文

NHK朝の連続テレビ小説「花子とアン」が放送されています。高い視聴率が期待されますが、ドラマでは仲間由紀恵さん演じる葉山蓮子（モデルは歌人柳原白蓮）に焦点が当てられています。

しかし、村岡花子さんにとってもう一人の重要な存在である片山廣子の名前は登場しません。

その片山廣子さんは1906年（明治39年）から1944年（昭和19年）までの38年間、環七・春日橋交差点の北側、東急バス馬込循環線の中央１丁目バス停の向かい側の山王３丁目に住居を構えられていました。

ご近所の方に当時のお話しを聞いた結果、判りましたことは、竹藪の大きな御屋敷にお住まいだったこと、地続きにお住まいの方の記憶では、「一度だけお見かけした。うわさ通りの美人であった」とか、「人力車で出入りしていたので、近所で見かけることは少なかったのでしょう」とか、「そう言えば人力車屋さんが向かい側に在った」など、当時の片山邸の雰囲気を想像することは出来ました。

村岡花子さんは、片山廣子さんを慕って1919年（大正８年）に大森・新井宿（現・中央３丁目）に転居され、50年間お住まいでした。私の住む中央１丁目は、片山邸との丁度中間にあります。

もし当時だったら、道を歩いていて、片山邸を訪ねる村岡さんに出会って、ご挨拶くらい出来たかも知れない、片山邸を訪ねる女流文士の世界を垣間見られたかもしれない等々、「アン」お得意の想像の世界を掻き立ててくれます。

片山貞次郎・廣子ご夫妻は大森の地域文化の発展に貢献され、その後輩の村岡花子さんも50年間、大森から希望の世界を送り続けました。

「花子とアン」のTV終了後も、この大森が日本全国に存在感を保ち、地域文化の維持・発展が出来ればと願っています。

補注：片山貞次郎さんは、明治39年設立の一般社団法人「大森倶楽部」（今も活動している地域文化活動法人）の発起人に名前を連ねています。

❀ 片山廣子(明11～昭32)のプロフィール

佐佐木信綱門下を代表する歌人。アイルランド文学の翻訳家としては松村みね子の筆名をもち、村岡花子とは、東洋英和女学校の同窓で、15歳先輩にあたります。

室生犀星、芥川龍之介、堀辰雄らと親交があり、馬込文士村の主要メンバーでもありました。

歌集に『翡翠（かわせみ）』『野に住みて』、随筆集に『燈火節（とうかせつ）』、翻訳に『愛蘭（アイルランド）戯曲集第一巻』、『シング戯曲全集』など。

新井宿へは、明治39年３月に転居し、大正９年、夫・片山貞次郎と死別。昭和19年に戦災から逃れるため、杉並区の浜田山に疎開。昭和20年春、新井宿の片山邸は、建物強制疎開の対象となり撤去。

昭和30年、『燈火節』（昭和28年暮しの手帖社刊）で、第三回エッセイスト・クラブ賞受賞。

この『燈火節』の「池を掘る」という章には、新井宿での戦争体験が、克明に描かれています。

❀ 片山廣子と村岡花子の出会い

明治42年頃、歌人の佐佐木信綱の紹介で、村岡花子は、片山廣子と出会い、「よろしかったら、本を見にいらっしゃい」という言葉に甘えて、新井宿の片山邸に足を運ぶようになり、ここから二人の交際が始まりました。大正15年、花子の最愛の長男道雄が、５歳で帰らぬ人となった時、絶望から再び文学の道へと、導き出してくれたのが、片山廣子でした。廣子のすすめで花子が渾身の力をこめて翻訳出版した『王子と乞食』は花子の翻訳の力を文学界に知らしめました。

花子は、「もしも、この指導者であり友である片山さんの近くに住んでいなかったら、（中略）、かつて持っていた文学の夢も愛も、失わせてしまったかもしれないと思っている」と書いています。

片山廣子との出会いがなければ、村岡花子による「赤毛のアン」シリーズの翻訳出版は、もしかしたらなされていなかったかもしれませんね。　（敬称略）

＜参考文献＞　『アンのゆりかご　村岡花子の生涯』
（村岡恵理著、2011年新潮文庫刊）

＜写真提供＞　東洋英和女学院